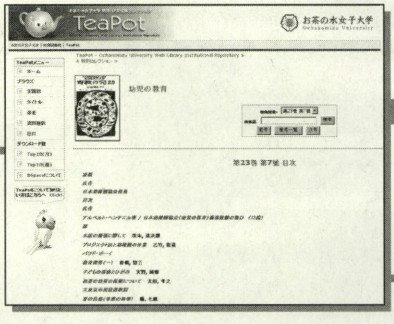
## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（13）

# 戦時下の『幼児の教育』

米田俊彦




お茶の水女子大学附属図書館の WEB サイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

### ▼はじめに

私自身は幼児教育実践や幼児教育史に詳しいわけでないが、第二次世界大戦下の教育改革の研究を長くやっていたこともあるので、試みに、画像データを読み、あるいは検索機能を使いながら、戦時下の『幼児の教育』を概観し、その変化を読み取ってみることにしたい。

なお、記事ごとに別データとなっていて、多数の記事を読むことがそれほど容易ではないことから、ここでの「戦時下」は一九四〇（昭和15）年以降に限定することにしたい。

### ▼ページ数の減少

『幼児の教育』（以下「本誌」と表記する）は一九四四年十二月の第四十四巻第十一号を出してから一九四六年十月に第四十五巻第一号を出すまで、一年九か月

にわたり休刊した。突然の休刊ではあったが、ページ数の変化を見れば、紙の確保などの事情で発刊そのものが困難になりつつあったことがわかる。ネットの各号の目次には、その号全体と各記事の最初と最後のページが記載されているので、記事のページ数が簡単に把握できる。

本誌は、一九四三年までは八・九月が合併号の形で発行された。四四年は合併号という形式がなくなって、八・九月も通常通り刊行された。通常の号の平均ページ数と合併号のページ数は次のように推移した。

| | 〈通常号平均〉 | 〈合併号〉 |
|---|---|---|
| 一九四〇年 | 57・4ページ | 91ページ |
| 一九四一年 | 54・5ページ | 92ページ |
| 一九四二年 | 50・6ページ | 80ページ |
| 一九四三年 | 33・9ページ | 46ページ |
| 一九四四年 | 23・1ページ | |

通常号も合併号も、一九四二年までは目立たない程度のペースでページ数が減っている。四三年に入ると、第五号までは40ページ前後を保つが、第六号以降は30ページ前後となり、最後の第十二号は21ページになってしまう。四四年には、30ページを超える号もあれば20ページに満たない号もあるという乱高下状態となり、第十号は16ページ、第十一号は19ページとなって、以後休刊となる。休刊直前の状況は、第四十四巻第十号の倉橋惣三による「陣友音信（三）—本誌発送の日に—」という記事の次の記載によってある程度理解できる。

**頁数は少なくなりました。資質も粗くなりました。活字も小さくしました。字詰も窮屈にしました。が、そんなことが言つていられませうか。**

**〔中略〕**

**今日の雑誌は一冊と雖も、「自分の紙」で出来ているものはありません。いづれも「国の紙」を与へられて印刷しているのであります。しかもその「国の紙**

が、どんなに行詰つているもの、従つて、どんなに貴重なものでありませう。わたくし共は、それをよく考へて編集しています。

## ▼倉橋惣三の時局に対する積極姿勢

倉橋が本誌に総計764件もの記事を寄せていることは、すでにこのシリーズの一回目（第一〇八巻第一号）の湯川嘉津美氏によって指摘されている。戦時下においても記事数は多いが、それ以上に、時局に対する積極的な姿勢という点でも目立っている。たとえば次のような記事である。

- 幼児と倶に皇紀二千六百年を迎ふ（一九四〇年第一号）
- 国民幼稚園を目ざして（一九四〇年第八・九号）
- 動員せられた幼稚園（一九四〇年第十号）
- 国民幼稚園の名に於て（一九四一年第二号～第六号・第十号）
- 戦時下幼稚園の任務（一九四二年第一号）
- 戦時国民幼稚園（一九四二年第二号～第十二号）
- 明治天皇御製（一九四三年第一号～第十二号）
- 戦時保育の本義と実際―昭和十八年八月戦時保育講習会講義筆記―（一九四三年第八・九号～第十二号）
- 戦時保姆の職責の重化と拡大（一九四四年第五号）
- 子等と共に戦果を聴く（一九四四年第一号）
- 飛行機をつくる子等（一九四四年第三号）
- 敵（一九四四年第六号）
- 幼児に対する時局教育（一九四四年第九号）

一九四三年の第一号から一九四四年の第六号まで巻頭ページが設定された。その巻頭記事はすべて倉橋が執筆した。一九四三年中は「明治天皇御製」（明治天皇作の和歌をやや時局に引きつけつつ紹介、解説した文章）の連載で、一九四四年に入ると、右に挙げた「子等と共に戦果を聴く」など、毎回タイトルを変えての短文になる。「明治天皇御製」などは、それほど過激な記事ではないが、この倉橋の毎号の巻頭ページの上部、

四分の一ほどのスペースに、大きな活字で、「保育奉公大東亜戦争必勝完遂」と書かれている（左参照）。全体の活字が小さくなっているなかでの大きな文字なので、インパクトが非常に大きい。これは、明らかに倉橋の強いメッセージである。

このスローガンのような文字の存在は、本誌現物の目次にもネット上の目次にも示されていない。巻頭ページを開いて初めて知ることになる。巻頭ページは、雑誌において最も目立つ位置にあるが、記事単位で分割してデータ化すると、巻頭ページは目立たなくなってしまう。

保育奉公

大東亜戦争必勝完遂

子等と共に戰果を聽く

倉橋　惣三

先づ逸壯な軍艦行進曲の響とつれて子等の耳がゆれてゐる。椅は出さない。手は膝へ融く動かしてゐるが、膝は固くさせて貰ったていふ日本中が耳を傾で、待ちうけてゐる報道の強烈なるにも拘げてなるべくこと。涙でもいこと知つて大の。

山がしいが、緊張とは正に嬉しく、その壯烈快先が直ちに眼前えて全部であるかしい。何々を強つて、何々を奪つて、と聴かあげられて ゆく大の戦。

子等の顔がかゞやく、可愛い。母がひきしまる。小さい拳が握りしめられる。一人の子がもの眼を開けて先生の目を見た。人の子がもの眼を開けて先生の目を見た。

つぎ〳〵に先生の目を見た。子等の眼がきらめいた。仮の勝利の報に、子等は敬虔の目をみはつた。先生が頭を垂れた時、子等も自ずから頭を垂れた。

先生が動かないから、子等も身じろがしない。先生が頭を垂れた時、子等も自ずから頭を垂れた。

のんだ。あゝ自強何機。子等は敬虔の目をみはつた。先生は寝ちざるもの何機。その象徴が子等に行進曲の響いた。子等はもうぢつとしてゐない。背立ち上つたが、先生がまだ動かない。軍艦行進曲が響いた。子等はもうぢつとしてゐない。背立ち上つたが、先生がまだ動かない。

りゐ招きしわつてゐるではないか。先生はきつき自分の眼へ涙ぐんだ。子の耳へ飛べくうに成して、いつしとし地図の前の子等の仲間に入った。小さい護国の英雄への感謝が、あのまゝ物いかけがいへ。

該の間にきし前へ出てから、目を子等の一人々々の目へ移したが、そのまゝ物いかけがいへ。

すに成るる。大和魂のよろこび。自強未曾有の英雄への感謝が、あのまゝに集れもつれて。

晩に人の子が、なぜ高鳴るといつた。ほかの子等皆それにつゞいたが、先生のひとりだけは、涙の方へ向け出て行つた。先生の顔が初めてころびた。涙が、眼へ向け出て行つた。先生の顔が初めてころびた。涙がつくと鳴の保育笠で、子等の軍艦行進曲が鳴まつて。

――聯隊砲兵隊長小倉――

▲『幼児の教育』第44巻第1号1頁

## ▼戦時下に特徴的な論調

一九三七（昭和12）年に始まる日中戦争は、日本にとって総力戦であった。不要不急の生産や社会的活動は極力縮小、制限された。小学校は一九四一年度から国民学校となり、「皇国民錬成」という趣旨を掲げて総力戦体制の中に位置づけられた。倉橋なども幼児教育（保育）が不要不急とされないために、幼稚園を「国民幼稚園」化すべきだとの主張を本誌で始めた。

戦局が悪化してくると勤労動員が強化され、家庭の主婦・母までが動員されるようになってくる。すると、

**「幼稚園が家庭に代位して幼児の保育養護に当ることに依つて、戦時下における母・主婦・姉達の家庭・隣組・軍事援護生産増強等の能率を高める貢献は決して過小に評価さるべきではない」**（下村寿一「戦時下にお

ける幼稚園の重要性」、一九四四年第一号2ページ、下村は東京女子高等師範学校長）といった幼稚園の時局に対する有用性が強調された。

大学などの研究機関に対しては、戦時動員の一環として科学動員が実施されたが、それに合わせて幼児教育（保育）にも科学を導入しようとする議論が現れた。「科学」が含まれるタイトルを検索すると全部で22件の記事がヒットする（「図画科学理」でヒットする1件を除く）。このうち10件が一九四〇年代に刊行された号に収録されている。次の通りである。

・「科学教育と幼稚園座談会」（一九四一年第三・四号）
・岩松多吉「科学的芽生えを重んずる遊びのいろいろ」（一九四三年第四・五号、岩松は東京市文海幼稚園長）
・有元石太郎「幼児の科学指導の理論と実際　戦時下の観察部について」（一九四三年第十二号、有元は東京都立武蔵高等女学校の所属）
・清水虎雄「幼児への科学教育」（一九四四年第一号、清水は文部省科学局長）
・有元「経験的興味時代に於ける　幼児の科学疑問の調査」（一九四四年第二号）
・有元「幼児の科学疑問調査（二）六歳幼児の部」（一九四四年第三号）
・有元「幼児科学疑問の心理的考察」（一九四四年第四号）
・有元「皇国民錬成と幼児の科学教育」（一九四四年第五号）

一九二〇年代前半に1件あって、以後四〇年代まで「科学」を含む記事はない。やはり科学動員体制への幼児教育（保育）の貢献のアピールという文脈で理解されるべき現象である。

ちなみに、戦時下には小学校の国民学校への転換などの改革が行われたが、その原案を作ったのは一九三七（昭和12）年十二月に内閣に設置された教育審議会であった。同審議会は三八年十二月に幼稚園改革につ

いても答申した。答申では「簡易ナル幼稚園」を認める、保育において保健や躾を重視する、幼稚園と家庭との関係を緊密化する、といった方策を提言した。下村校長も委員として深くかかわったが、「国民幼稚園」や科学の重視などは盛り込まれなかった。「簡易ナル幼稚園」は女性の就労を促すための託児所的な施設である。

## ▼おわりに

戦時下の記事を概観してみると、倉橋ら日本幼稚園協会関係者が、幼稚園、幼児教育（保育）、そしてこの『幼児の教育』誌そのものの生き残りのために努力していた姿が浮かび上がる。倉橋の時局迎合的な論の展開も、その文脈で理解できる面が大きいだろう。

しかし、幼児教育（保育）は、もともと直接的な成果や有用性が現れにくいものである。科学教育にしても、それまで論じてこなかったことを突然言い出したという印象がぬぐえない。「国民幼稚園」に至ってはまったく説得力がない。国民学校は「私立国民学校」の存在を否定して（私立小学校を排除して）スタートしたが幼稚園の三分の二は私立だった。しかも一九四一（昭和16）年にようやく五歳児就園率が10％に達した状態である。幼稚園を「国民幼稚園」にしたところで国民学校と同様の機能を発揮できないことは、あまりにも歴然としていた。

ネット上の検索で、『幼児の教育』誌の個々の記事の内容はもちろん、雑誌としての論調や性格の変化などもある程度読み取れることが確認できた。記事単位でデータ化されていることによる限界、何度もクリックしなければならない煩わしさなど、難点がないわけではないが、資料として多くの人が平等に共有できるだけでも大きなメリットである。さらに多くの雑誌が同様に公開されることを期待したい。

（お茶の水女子大学教授　教育史）